東洋文庫 99

菅江真澄遊覧記 4

菅江真澄 著
内田武志
宮本常一 編訳

平凡社

内田武志（うちだたけし）　明治42年秋田県生。日本常民文化研究所員として，「静岡県方言誌1・2・3」「日本星座方言資料」「菅江真澄未刊文献集1・2」，ほかに「真澄遊覧記総索引歳時篇」「松前と菅江真澄」「真澄遊覧記抄・秋田の山水」「菅江真澄の日記」などの編著あり。現住所　秋田市手形山崎9—24

宮本常一（みやもとつねいち）　明治40年山口県生。大阪天王寺師範学校卒。専攻　民俗学。日本常民文化研究所研究員，武蔵野美術大学教授。主著「日本残酷物語」（平凡社）「日本民衆史」（未来社）「日本の離島」（未来社）。現住所　東京都府中市新町3—9—12

菅江真澄遊覧記4〔全5巻〕　東洋文庫99

昭和42年9月10日　初版発行

定価450円

訳者　内田武志
　　宮本常一

東京都千代田区四番町4番地
発行者　下中邦彦

発行所　東京都千代田区四番町4番地　振替・東京29639　株式会社　平凡社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社石津製本所

© 株式会社平凡社　1967

目　次

雪の道奥雪の出羽路　三
しげき山本　四〇
雪の秋田根　五七
すすきの出湯　七九
にえのしがらみ　一一
みかべのよろひ　一二六
かすむ月星　一五〇
おがらの滝　一七一
十　曲　湖　二〇四
百臼の図　二二一
ひなの一ふし　二四五

解　説　内田武志　二八〇
あとがき　内田武志　三〇六

旅のあと（本文挿入地図）
その一　雪の道奥雪の出羽路・しげき山本・雪の秋田根・すすきの出湯・にえのしがらみ　五
その二　みかべのよろひ・かすむ月星　一三
その三　おがらの滝・十曲湖　一七四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

菅江真澄遊覧記

4

菅江真澄 著
内田武志 編
宮本常一 訳

凡　例

一、かっこ内のことば

〔　〕真澄の著書名　《　》原注　（　）訳注

一、本文の月日は旧暦による

一、和歌・俗謡・方言などは原文のまま

一、アイヌ語はカタカナで表記した

雪の道奥雪の出羽路（地図　5ページ参照）

ことし（享和元年、一八〇一）過ぎ去った秋のころから、ここ（青森県西津軽郡深浦）を出発しようと、しきりに思っていたが、紅葉や月を賞でたりして日数をかさねているうちに、時雨の季節も過ぎて、初雪が降ってきた。そうこうするうちに、梢が花の咲いたように眺められるほど、大雪が降りつもるころになってしまった。

もはや霜ふり月という名にそぐわない季節になったが、十一月の三日、この夜が明けたら出かけようと心にきめていたところ、なれ親しんだ友人たちが送別の宴をもよおしてくれたので、それで日をくらし、きょうは四日になった。陸奥の国津軽花輪の荘（注）深浦の港辺で、この朝早く、旅装の用意をととのえると、人びとから名残の歌をそれぞれ贈られたので、その返歌をよんだ。

わかれちの袖はなみたそしくれける又あふことはいつとちきれと

やがて出発し、浜辺にたたずんで、遠方にみえる内外の社（伊勢神宮）をしばらく遙拝した。小坂をのぼり、木花開耶比売の社のほとりの陰の町という部落のはずれにくると、野良のような芝生の霜をふみしだいて、老若男女六十人あまりのひとびとが近づいてきて、くちぐちに挨拶した。

「また、ここにおいでください。わるいものを食べてはいけません。馬から落ちないようにしてください。寒さに気をつけてごぶじに暮らしなさい。わたしは小石を拾って朝夕ごとにきよめましょう。これでお別れです」

旅行にでた人があると、そこの家では小石をふた

つ拾ってきて、それに水をかけ、そのひとが健脚でぶじに旅をつづけられるようにと祈る習俗(注)がある。これは他国の旅人にするならわしではないが、ここになが い年月をすごしたわたくしを、地もとの人と同じように思って、こう言ってくれたのであろう。

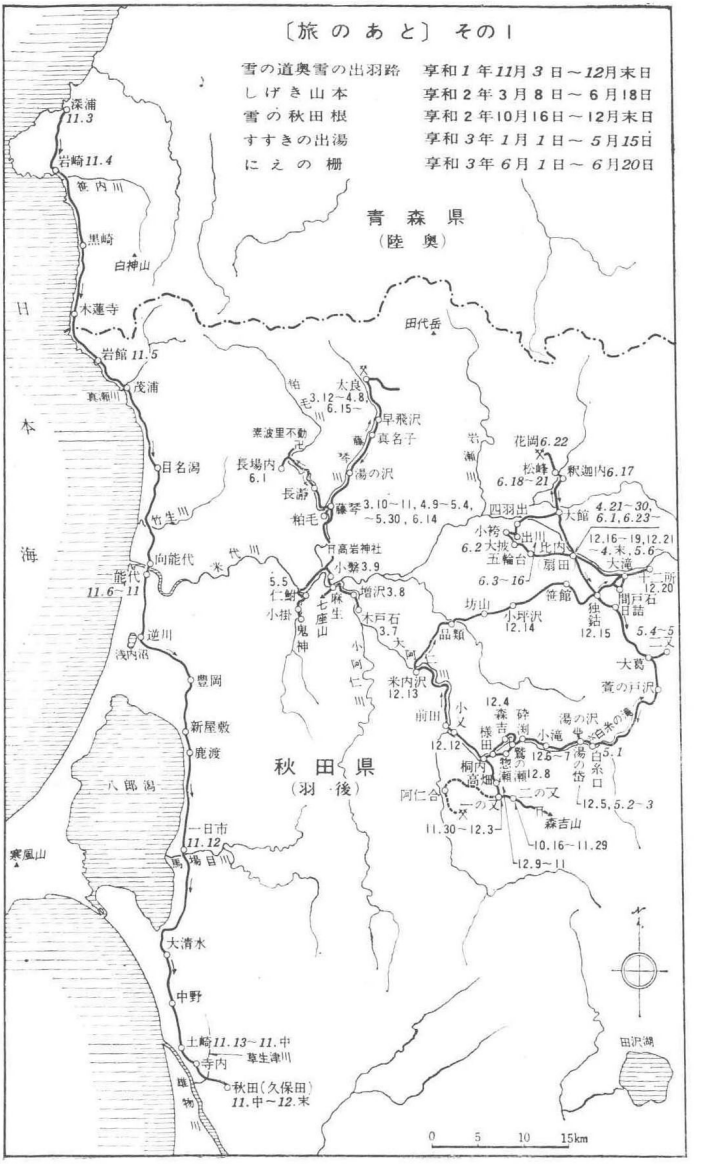
この親切なこころざしをおもいやって、

わか袖におつるなみたの玉かしはかかるなさけをいつ忘るへき

わたくしの袖をひき、馬の鞍をおさえて、たくさんの人々が名残を惜しみ、とりどりにことばをかけてくれるので、ますます別れて行く気にならなかった。

しかし、馬もかなり進んで、みんなから遠ざかると、あとにのこった多くの見送りのひとたちは、手をふり、「やや」と、なんども大声をあげる。つきそってきた人たちも馬の左右から笠をささげたり、手をふりながら声をあわせて、「や」とこたえた。やがて道が高い岡にさしかかると、わたくしたちの姿がみえたのであろう、また、「やや」と呼ぶ声がきこえる。ふりかえると、馬を早く走らせているので、もうだいぶ遠くへだたってしまい、大ぜいの人声もかすかに聞こえた。ここまで送ってきた竹越自養は、「それではここで」といって帰って行った。なんだか心細くなったが、深浦でわたくしの宿の主人だった貞易（竹越氏）のほかに大工の与之助が、今夜お泊まりになるところまでごいっしょするといって、親しく送ってきてくれた。

めくら坂というところも過ぎて、左方に雪がきらきらとつもっている大山が間近く見える。名をきくと、杓子岳とこたえた。このあたりには、真白な山が重なりあっている。なお行くと、突然さっと風がおこり雨が降りだした。金神の坂も越えて、岩崎の浦（西津軽郡岩崎村）の部落にはいった。ここから右方に、しばらく行って、沙間（岩崎村のうち）という磯辺の村にでて、萱森左兵衛という知合いの漁師の家に、まだ日の高いうちについたが、雨風がま


〔旅のあと〕その1
雪の道奥雪の出羽路　享和1年11月3日～12月末日
しげき山本　享和2年3月8日～6月18日
雪の秋田根　享和2年10月16日～12月末日
すすきの出湯　享和3年1月1日～5月15日
にえの柵　享和3年6月1日～6月20日
青森県
(陸奥)
秋田県
(羽後)
日本海
深浦 11.3
岩崎 11.4
黒崎
白神山
木蓮寺
岩館 11.5
茂浦
目名潟
竹生川
向能代
能代 11.6～11
逆川
浅内沼
豊岡
新屋敷
鹿渡
八郎潟
一日市 11.12
寒風山
大清水
中野
土崎 11.13～11.中
寺内
秋田(久保田) 11.中～12.末
田代岳
太良 6.15～
早飛沢
真名子
湯の沢
長滝
柏毛
藤琴 3.10～11, 4.9～5.4, ～5.30, 6.14
甘高岩神社
小繋 3.9
増沢 3.8
木戸石 3.7
麻生
七座山
鬼神
小掛
仁鮒 5.5
米内沢 12.13
前田
小又 12.12
品類
坊山
小坪沢 12.14
笹館
扇田
出川
五輪台
小袴 6.2
大挽
大館
四羽出
花岡 6.22
松峰 6.18～21
釈迦内 6.17
4.21～30, 6.1, 6.23～
12.16～19, 12.21～4.末, 5.6～
大滝
一ノ所 12.20
聞戸右
日詰
座鈴 12.15
5.4～5
大鶴
鷲の巣
湯の沢
白系口
森吉山
桐内
高畑
阿仁合
一の又
二の又
森吉 12.4
様田
鷲の巣
小滝 12.6
湯の沢
12.8
11.30～12.3
10.16～11.29
12.9～11
12.5, 5.2～3
5.1
田沢湖
0 5 10 15km

すます激しいので、ここに泊まることにした。送ってきてくれた大工は、またあうこともありましょうと名残り惜しそうに別れていった。その夜は、貞易とともに語り、暮れた。

五日　夜来の雨も巳ひとつ（午前十時半ごろ）には晴れあがったので、出発の仕度をしていると、主人の萱森が、きょうばかりはとひきとめたが、「名残りはいつになってもつきないものだ」というと、それではしかたがないと、馬小屋からよい馬をひきだしてきた。「これにのってお出でなさい」と、しんせつに荷鞍を用意して、浜路をしばらく送ってきたが、少年に「馬をよくひいてあげろ」と注意して別れていった。岩崎の浦辺に出た。ふりしきる雪まじりの朝風が大変さむく、やがて浜中という部落を過ぎたが、この辺の家の屋根には、千木のように、交差させた木を棟に伏せた土おさえの上においている。そのありさまは、外が浜（青森湾沿岸）でみた漁師の部落と同様で、そこではこれを牛鞍（注三）と呼んでいた。そして門口には鳥居のような二柱の神門（注四）を、くろ木でつくって立て、それに注連縄をひきまわしてあるのは、ちょうど神殿のようで、上古のさまをうかがうにじゅうぶんである。また篠葉にしとぎ（生米をつきかためた餅）をさし貫いたものを束ねて、それを軒毎にさしてあった。これをほうじ事といい、忌のやまひ（疫病）を避けるためのものだという。このごろ、風邪がはやって、どこの家でも病人がでているので、このまじないをするのである。

さざない川（笹内川）を渡るころ、空がかきくもってきて、あたりいったい暗くなり、笠も衣服もとおるほど霰がたたきつけて、馬も歩きにくそうである。久田、正道尻を経て森山という磯辺の山にでた《ささない、正道しり。ナイは沢という蝦夷辞で、シリとは崎という蝦夷辞である。むかしこのあたりに蝦夷が住んでいたことが知られる》。この辺は景色のよいところではあるが、あられが降って、たいそう寒いので見回す余裕もなく、弓弦前という小川

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

をわたって松神の村にでた。ここもすっかり降り埋もれて、黒崎も、名を白崎とよびたいように、雪と波のなかに白く見えていた。左方に高い磯山がいくつもつらなっているなかに、ひときわ秀でた山は白髪が岳だという《白神山、白髪の磯の地名は北海道にもある。出羽の男鹿半島にも同じ名があり、紀の国にも同じ地名がある》。春や秋ならば、どこも見物したいようなよいところであるが、今ごろは山もとしよりになって、などと馬子らがおかしい話をするので、

こまかへる春やまつらんとしたかきしらかみ山の雪のをもかけ

津梅川の橋をわたると、大間越の部落である。この津梅川で、ある年、雲砂《蛭石は仙台の面白川のほとりに多い。金雲母即雲母黄色者別録日雲砂青黄色方俗これをひるいしといっている。火に投ずると蛭の形をする、のち金粉のようである》を拾ったことがある。そのころから知りあった菊池某（第三巻〔外浜奇勝二〕二一八ページ参照）のもとで休息して、乗ってきた馬を返した。それから、ここの主人は、「足の早い馬に鞍をおけ」と言いつけて、また「雪に埋もれた山路は寒いでしょう」といって、あお（カモシカ）の皮衣というのをとりだして、「これを着ておいでなさい」と、ねんごろに世話をしてくれた。まもなく、関所を越えた。このあたりまでは先年、見たところなので詳しくは記さない（第一巻〔外が浜風〕及び第三巻〔外浜奇勝二〕）。仏崎というところを経ていくと、雪のなかに高くかかっている滝が、なかばは凍っていた。

木欒子坂（木蓮寺）をのぼったり、くだったりしていくと、路傍にその名の木がたいそう多く、落ちている実を、この土地の人たちが拾って、糸につらぬいて数珠にしている。ここにむかしは寺があったところだと話すのを聞きながらゆくと、陸奥と出羽の国とをわける境界の神、境明神の祠がふたつ、崖ぎわにならんでいた。この神に幣をたむけてから、

出羽の国界にはいり、菅生の崎（須郷岬、ここから秋田県山本郡八森町になる）も過ぎて、すこしばかり枯草のあるところで馬を休ませ、人びともたばこをくゆらせた。

つたの沢というところで、何の木だろうか、大木があり、それにもぎ木の枝をびっしりと打ちかけてあった。どこでもおこなっている鍵かけという風習で、恋い慕うひとを思って道祖神に願う占いにかけたのであろう。この下方に、御滝といって、神のおわしますところがある。その滝の落ちてくる磯辺にいって、一晩じゅう、寝ずに笛を吹いて滝の神に手向けると、かならず妙なるおもしろい曲が吹けて、その道の名人になるといわれている。笛を吹こうとする人たちは、猿楽の笛、神主の神楽笛、童の草刈笛でも、みなここにきて手向けるというので、この磯辺の滝を笛滝とよんでいる。

小菅生崎もはるか後にすぎて進み、日は暮れて暗くなったが、夕月がわずかに木の間から照るのをたよりに山路をたどって行くと、雪が降ってきて袖もぬれ、寒さが身にしみてきた。八幡の御神といって、男根をまつるという社があり、その鳥居がどれほどあるのか、たくさん立ちならんでいるのが月かげに見わたされた。

やがて関所も近づき、なおけわしい路を下りて、荒垣のこちらに立って咳ばらいすると、役人が関所の戸をおしひらいてあらわれ、誰かと問う。宿はどこへ泊まるのか、宿がなければ保長の証明が必要だという。

岩館の浦（山本郡八森町）の部落にはいって、菊地小三郎の家についた《この浦は、八森、岩館の麻苧剝織といって、厚く織った布を出す。津軽根子の浦では麻屑織、能代の浦では木綿糸割織といって産する》。

この浦の須藤有衛門という人の家に、親鸞聖人の御筆で南無阿弥陀仏、蓮如上人の描かれた画阿弥陀仏、実如上人の御筆という二通一巻の御書を伝え持

っている。先祖の須藤刑部左衛門は、その子須藤兵部とともに陸奥の武士であったが、南部の乱を避けて、津軽の猿賀村（南津軽郡尾上町）に逃れ、それからこの出羽まできて、このような磯山のかげに田畠を開墾して住んだ。それで、そこを子孫の有衛門にちなんで有衛門崎という。近年になって、このようにその一族が岩館にきて住んでいるということである。

六日　暁天の星をいただいて、漁師たちは起きたので、わたしも、ともに起きて顔を洗った。鰰の網曳きをするといって、たくさんの小舟が漕ぎ出て、荒れ狂う磯の大波のなかを、やすやすと乗りまわっている。このような冬の荒海で苦労する漁師の世渡りは、蝦夷の腦納獣狩りと同じである。岸辺の岩の上では男や女が群がって立ち、「あっちだ、こっちだ」と手を振り、波にからだをぬらしながら叫んで、魚群のいる個所を舟に教えている《はたはたという魚は、陸奥にもいるが、とくに出羽の秋田の名産である。佐竹常陸介義重（注八）と小田讃岐守入道天庵（注九）の争いがいったん和睦をむすんでいたころは、常陸でもこの魚がたいそう多かった。佐竹家が秋田に移封されると、また、はたはたが秋田の海に多くなった。世間の人は、鰰は佐竹家につき従う魚だといっている。（注一〇）

この魚は、常陸国の鹿島が崎、あるいは陸奥の西蝦夷の島のあたり（北海道西部）、また津軽の海では鯨が沢や深浦の港、大間越の浦など、出羽の国では男鹿半島の南側の船川、北側の染川《むかしは北の郡染川といったが、いまは北の浦とし、染川を相川といっている。北の浦から相川の浦のあたりまで、毎年はたはたが多い。南は船川の浜で多くとれる》のほとりに、たいへん多い。またこの岩館の浦々にも、多くとれるので、これを秋田の男鹿鰰、八森神魚とよんでいる。秋の土用が過ぎて二十日と一夜を経ると、とれづまといって、いつも十月半ばごろ（新暦十一月下旬）吹きしぶき、沖には、ごろごろと必ず雷がなる。それをいわつめという。魚集と

いう意味であろうか。この土地の人の癖で集めることを、まつめるというが、そんな気持でいったのではなかろうか。雷をはたたがみということばは、この魚の名から起こったものか、雷の鳴り響くころ、とれる魚なので、その名としたものであろうか。この魚集が沖に鳴る場合を豊漁としており、山に響くときは魚が少ないという。鰰には、黒めす・白めす・霰形・黄肌・黄金肌などといって五種類がある（図絵説明に、雌鰰に黒めす・白めすあり、雄鰰に黄金肌・黄肌・白肌などの種類あり、とある）。

網漁には、起こし網・小曳網・投網・すくい網の種類があり、すくい網は五尋ばかりの長柄のついた網で、荒磯の岩の上にこれを持って立ち、寄ってきた魚を、昼夜をとわずすくうものである。起こし網は引き網にやや似ている。投網はあまり多く用いられていないという。漁の最中には、沖に鷗がむらがり、磯には烏があつまる。そして、人がたくさん出て、捕った魚をはかり桶というもので計って、あちか（ざる）にいれ、それを（仲買人が）争い求め、馬に負わせて関山を越え、陸奥（おもに岩手県）に運ぶ。あるいはここから能代の港や阿仁、比内（北秋田郡・大館市など）に持ち運んで売る。男鹿半島でとれた鰰は土崎の港、久保田（秋田）・仙北・由利・平鹿の各郡に、あるいは酒田（山形県）へ、また最上越えもして売りさばきにいく。漁の真盛りのころは、どこの浦にも魚舎をびっしりと建てならべて、松前の鮭の網びきのように、あまの村君という古い習俗がのこっている。その、さかんに網びきが行なわれる漁の最盛期には、磯辺には魚が山をなし、また村はずれには新しく徴税の役人をおいて、馬の荷を改めるなど、たいそう賑わい、なかなかの見ものである。しかし、もはや漁期も終りのころになると、この鰰がてんでに藻にうみつけたぶりこというものを拾おうと、かな熊手のような道具で柄のたいそう長いのや短いものを持って、かきよせてとり、あるいは波にうちあげられた浜のぶりこを拾う。そ

から長き鍵も鰤の漁にもてはこひてける、熊手してもはた〳〵のぶりこてふものの、なびきも、こるも、あるは磯辺の岩に付たるをかい集て縄につらぬいてそうるめる。

鰤の腹子をしほり出してけるをぞろりごといふ、それを折敷に盛りて潮水を汲かくれば固りぬ、それをおしき雷子（ブリコ）といふ。

甲　繋雷子（ツナギブリコ）
乙　方神魚子（カシキブリコ）
丙　ぞろり子

のころはもう、雪がこぼれるようにさかんに降ってくる。

やがて、浦伝いにすすむと、岸に高くうちあげてくる波が沓をぬらした。振り仰いで見るような立岩という、たいそう高い、越後の根屋の鉾楯岩（新潟県岩船郡山北村）に似た岩があった。小入川の浦の部落にはいった。この山陰に銀山[注三]があったなどと話していた。これからたどる歩坂というところは凍っていて、馬も人も、越えにくかったので、三沢渡りをして、滝の間村をへて横間村にきた。磯山の峰に薬師仏を神とまつって、鳥居が枯木のなかに見える。崖の路をおりると、三内（山内）という村があった。津軽路にも三内という村（青森市）があり、そこで古瓦、埴輪のような土器を掘りだしたことがあった（第三巻〈すみかの山〉一五五ページ参照）。その辺は古い土地なので、寒苗の里でもあろうかと思っていたが、同じ地名がどこにもあったので、ほんとうはどこか迷ってしまう。

馬背内川（真瀬川）の早瀬に丸木をならべて、長く高い橋が渡されている。それをこわごわにふんでわたり、立石という村にでた。茂浦という村と続いていて、境界がはっきりしない。このあたりは、春は漁で忙しいところだといわれている。ぶりこを拾うために、女たちが大ぜい浜へ出ていた。

ここからしばらく行くと、離れ磯のように隔たって見えるのを雄島という。この島のなかに清らかな泉があるというが、いわゆる沖の井[注三]が、この浦にもあったのだろうか。左方に遠く見えるのは雨零山とよばれているが、冬は雪降り山と名付けるとよいようで、中の間の帽子山とならんで、晴れた空に、雪におおわれた山の眺めは、たいへん趣きがふかい。

椿の浦にでた。異国船が寄せてくるのを警備する監視の役所[注三]が、高い岡につくってある。この浦の家は、ささやかな住居でも、内部の清らかなことはなみなみでなく、厠などの屋根は、かやを厚く束ねてふき、くれというものを上部にふせている。その

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo